

別冊 おおいだものがたり ～資料館資料編～

■『栗の花咲く最上川』（上・中・下） 没後30年企画展 小松均展より

今回は資料館で開催中の「没後30年企画展 小松均展」から、『栗の花咲く最上川』（上・中・下）をご紹介します。



この作品を前にすると、実際を超えて最上川らしい、という印象を受けます。ここに描かれるのは、現実よりもとりわけ清らかな水が滔々と流れていたり、青々とした木々が豊かに生い茂っていたりといった、

空想的に誇張されたような最上川ではありません。むしろ実際よりも色彩が少なく、単調ささえ含んだ風景といえるでしょう。それでも、見慣れた最上川の景色でありながら、それ以上に見せる何かが隠されています。小松作品では、強く刻まれた線や現場主義の制作方法が特筆されることが多いことから、それらの中に“実際を超える”秘密を探ってみたいと思います。

平面芸術である絵画において立体を表現しようとするとき、まず意識されるのが遠近法ではないでしょうか。例えば空気遠近法を用いる場合、対象が遠くなるほどその輪郭はぼやけ、色彩も淡く描かれます。ところがこの作品では、遠景は小さく表されるものの、手前の木々も遠くの山々や雲でさえも、同様の強い線で描き込まれます。透視図法（線遠近法）では、遠いものは消失点に向けて収束するため、どうしても窮屈な印象になりがちですが、遠景がはっきりと表わされることにより、空間がより奥行きと広がりを持ちながらも、こちらに迫ってくるという効果が生まれています。それが初夏特有の勢いのある空や木々を実際よりも印象的にしていると考えられます。

小松均といえば、現場に巻いた状態の画紙を持ち込んで、実景を前に描く制作スタイルも特徴的です。その際、一方向に固定された視野では、視野外まで及ぶ長大な画面を埋めることはできません。視点を横にスライドさせながら描くこととなります。この方法では、固定された視点の作品や写真などと比べると、縮尺が実際とずれることとなります。しかし俯瞰によって全体を捉えるよりも、対象との距離がずっと近付き、さらにはそれらの作品では表現できない視線の流動性を獲得しています。大型の作品を前にすると、その全体を視野に収めきれないため、視線を移動させながらの鑑賞となります。これが図らずも作品に内包された視線の動性と対応し、より作者の意図、作者が感じた風景を明確に読み取ることに繋がっているのではないのでしょうか。

今回は技法と制作方法という観点から、『栗の花咲く最上川』の秘密を探ってみました。折しも季節は春を過ぎ、栗の花の匂い立つ初夏を迎えます。是非“実際を超える”最上川を体験していただきたいと思います。

「没後30年 小松均展」は6月16日(日)まで



楽がき帳

新年度になりましたが異動はなく、広報担当5年目となりました。今年度もどうぞよろしく願います。

4月号の表紙は毎年、小学校の入学式ですが、4つの学校を順番にまわっているの、南小は私にとって2巡目で、当時の1年生は、今年5年生に。遠慮気味に撮っていた4年前の写真と見比べると、今回は様々な角度で撮影してたりして、少しは成長したというか、慣れたかなという感じがしますが、もう少しで元号も変わりますので、また新鮮な気持ちで頑張りたいと思います。

(あ)

町の人口 平成31年4月1日現在

世帯数	2,343 戸	(-5)
総人口	7,068 人	(-31)
男	3,472 人	(-12)
女	3,596 人	(-19)
(4月中の異動)		
出生	4 人	転入 16 人
死亡	13 人	転出 38 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。